

平成21年6月17日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2007年度～2008年度

課題番号：19820053

研究課題名(和文) 現代オントロジーについての基礎研究

研究課題名(英文) Foundation of Contemporary Ontology

研究代表者

倉田 剛 (TSUYOSHI KURATA)

九州国際大学・法学部・准教授

研究者番号：30435119

研究成果の概要：

現代オントロジーについての基礎研究を遂行するにあたり、存在論的諸カテゴリーのなかでもとくに論争的な性格をもつ命題の対象カテゴリー(命題・事態・事実)に焦点をあて、それを「環境の理論」と「オーストリア哲学」という二つの観点から明らかにしようとした。前者の観点からは、知覚し行為する生きものが住まう環境世界を適切に記述するために、事態(states of affairs)を基本カテゴリーとするオントロジーが不可欠であるという主張を生態学的実在論ならびに状況意味論の立場から正当化することを試みた。後者の観点からは、「現代オントロジーの最大の源流は19世紀後半から20世紀初頭のオーストリアに存する」という大きなテーゼのもと、とりわけ命題的对象に関する現代の諸議論を、中欧を起源とする現代哲学の枠組みのなかで捉えかえすことを提案した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000		700,000
2008年度	630,000	189,000	819,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,330,000	189,000	1,519,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：人文学

キーワード：存在論、形而上学、オントロジー、メタフィジックス

1. 研究開始当初の背景

哲学という枠を超えて、学際的な学問領域として発展しつつある現代オントロジーは、その「流行」と「厳密化」に伴い、自らの出自と可能性/限界について反省する機会を失い

つつあるのではなかろうか。こうした危機感が本研究開始当初の背景となっている。われわれはこうした現状に対し、オントロジーが忘却しつつあるいくつかの根本的な問いを問い直すことを提案した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年、知識工学やコンピュータ科学などをはじめとする様々な分野に応用されつつあるオントロジーの諸概念と方法論を根本から見直し、当該領域における諸研究を遂行するうえで必須となる基礎的条件を解明するとともに、中欧を起源とする現代哲学史の立場から、オントロジーを構築する際の適切な指針を提供することにある。

3. 研究の方法

(1) 中欧、とりわけオーストリア哲学史の観点から現代オントロジーの道具立てを再検討する。

(2) 生態学的なアプローチを用いて、環境世界を記述するために適切なオントロジーを構築する。

(3) 「存在論的コミットメント」、「経済原理」、「パラフレーズ」、「存在論的還元」などの従来用いられてきたオントロジーの方法論および原理を再検討する。

4. 研究成果

(1) 現代オントロジーの直近の源流はオーストリア哲学に求められるという、わが国ではあまり馴染みのない哲学史観をある程度の説得力をもって示し得た。

(2) 環境世界の構造が、事態というカテゴリーを基本とするオントロジーによって適切に記述されうるという提案を行った。

(3) 「カテゴリー」と呼ばれるオントロジーの基本概念は、たしかに「存在のカテゴリー」として解されねばならないが、それは決して「論理・文法的カテゴリー」や「認識のカテゴリー」と切り離して考えられるべきではないという主張を、フッサールのフォーマル・オントロジーに依拠しつつ、そして現代の主要な分析形而上学者たちに抗して正当化することを試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

(1) 倉田 剛 「F. ブレンターノによる非命題的判断論」, 九州国際大学『教養研究』第15巻第1号, 査読無, 2008年, pp. 37-62

(2) 倉田 剛 「ブレンターノ学派における命題と事態」, 九州国際大学『教養研究』第14巻第1号, 査読無, 2007年, pp. 73-98

(3) 倉田 剛 「志向的作用は〈関係〉として捉えられるか」, 『西日本哲学年報』第15巻, 査読有, 2007年, pp. 57-77

(4) 倉田 剛 「現代オントロジーの再検討」, 『現象学年報』23, 査読有, 2007年, pp. 49-59

[学会発表] (計3件)

(1) 倉田 剛 「現代オントロジーとオーストリア哲学における命題の対象論」, 日本科学哲学学会第41回大会、ワークショップ「現代のオントロジーとその源流」(オーガナイザー: 倉田), 2008年10月18日, 福岡大学

(2) 倉田 剛 “On F. Brentano's Non-propositional Theory of Judgment”, 日仏共同哲学研究会「オントロジーと現象学」, 2008年7月8日, 慶應義塾大学

(3) 倉田 剛 “On what it means for particularized properties to exist: Ontological and meta-ontological questions”, 慶應義塾大学人文COE公開シンポジウム「論理哲学と現象学との出会い—意味論を中心に」, 2007年4月21日, 慶應義塾大学

[図書] (計1件)

(1) 河野哲也他(編)『環境のオントロジー』, 春秋社, 2008年, 担当箇所: 第5章「事態のオントロジーと環境の理論」(pp. 125-56) および巻末の「読書案内」(pp. 267-75)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉田 剛 (TSUYOSHI KURATA)
九州国際大学・法学部・准教授
研究者番号：30435119

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：